
箱庭の魔女

夏白

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

箱庭の魔女

【Nコード】

N3722S

【作者名】

夏白

【あらすじ】

見上げる空はいつも白い壁。外の世界は壁の向こう。

王が与えた箱庭に住む魔女は、いつか囲いのない空が見られると夢見ていた。

前編

一国の王が住まうような広大な面積を使って作られてはいるものの、この箱庭の屋敷は実にせまかった。歩けど歩けど景色は変わらず、人工的に作られた森も、池も、庭も飽きていた。変わり映えないこの箱庭に二十年間も閉じこめられれば誰だってそう思うはずだ。

人知れず魔女はため息をついた。

魔女の家名であるローゼンクレラは国が建ったその時から王に仕える名門中の名門である。だが王に求められたのは政治手腕ではなく一族が持つ不思議の力。

ローゼンクレラは魔女の末裔だ。能力に差はあるが生まれてくる誰しもが占いの能力に秀でていた。ある者は未来を目にし、ある者は不思議の力を使い、水を操り天候をよんだ。

かくいう魔女もローゼンクレラの持つ特色の類に漏れぬ者として生まれた。夢を見れば過去と未来を。物に触れればその歴史を透視した。動物の場合はその過去を見た。意識せずとも、呼吸をするように離れた場所にある物を浮かせてみせた。

魔女の力は軍を抜いていた。それこそ現代に不必要な力は先祖返りとも言われ当時はもてはやされた。

けれど、次第に王は魔女を恐れ広大な庭の中心に赤錆色の屋敷を築く。そして魔女が三つの時に、この箱庭に閉じこめた。天高く積み上げられた四方の壁はある一つを動かせば屋敷もろとも巻き込み崩壊する。魔女の白い空は、王の殺意でもあった。

いつか王が出てくれるかと思いきや、魔法の希望が叶わぬと知ったのは、それを知ったときだった。

「私が何をした」

魔女は白亜を見上げ、いつもそう囁いていた。風すら満足に流れぬこの世界にいったい何の意味がある。それほど罪を己は犯したのだろうか。力があると言つことはそれほどまでに恐ろしいのだろうか。

人の心を覗き見ることができなければ、魔女はここへは来なかったのだろうか。人の思惑の中を上手に渡り、閉じこめられる事はなかっただろうか。

「お師匠様」

何番目かの弟子が魔女を呼んだ。どうやらいつの間にか物思いにふけていたらしい。二つ年上の弟子は不思議なことにローゼンクレラの者の中で唯一何の力も持って生まれて来なかった。

「何を考えていらっしやる？」

「何も考えてはいないさ」

愚鈍で才能のない恥さらしと罵られていた彼を拾ったのは魔女だった。ローゼンクレラの弟子達から、バカにするように聞いた話に興味を持って呼び寄せた。

魔女は会うまでその話を信じていなかった。まさか、本当に何の能力も無いものだとは思いつかなかった。会ったときは思わず笑ってしまったのだ。

酷く羨ましかつたのを覚えている。

「裏庭の花が咲きましたよ」

弟子が言つて無骨な指が窓の外を指した。その先にはくすみがかつた白い空と森が見える。白夜ではない。ここではその壁が魔女の空だった。

「花か、そうか……この季節だとまた赤い花だろうか」

「ええ」

「ここより北では青い花が咲くのだろうか？ 空と混じり合うのだろうか？ なあ、青の深みはどれほどの種類がある？」

「いくらでも。……お師匠様」

たしなめるような言葉に魔女はふくれて腕を組んだ。弟子は、しまったと口元をおおうが出してしまった言葉はどうしようもない。

4

「出られないのは分かっている！ 質問くらいいいじゃないか」

「と、取り寄せましょうか」

「いらん！」

慌てた声に怒鳴りつけた。たつたこれしきのことでは花を摘むのは忍びない。彼らはそこで生きている。

「いつか王は出してくださいませ」

「夢物語だ。証拠もあるぞ、この間の手紙で、夫を選べと言ってきた」

思い浮かべて苦り切った顔をした魔女に弟子は気遣わしげな視線を送るが、次の言葉に表情を凍らせた。

テーブルの上に置いてある仰々しい書状。押印の押されたそれは正式な王からの手紙であった。

「強い力を持つ者の子どもは強い力を持つと言われていたから、これも道理かもしれない」

けれど二十四年と少しの間、のらりくらりとかわしてきたのだ。どうして腹をくくれよう。子どもができてしまえば魔女と同じようにこの箱庭で暮らすのだ。これほど退屈で恐ろしい世界に我が子を置く事など魔女にはできなかった。

ふと、結婚してしまえばこの弟子はどうなるだろうかと考えた。

一般的に未婚の男女が同じ場所にいるのは認められないが、師弟の関係で二人は一緒にいる事ができた。だが夫は弟子がこの屋敷に残ることを良くは思わないだろう。

「お前はいつまでここに居るつもりなんだ。他の者達はすでに役職に就いてるのに」

「オレのような者を雇う場所はありませんよ」

「だが、お前には力の変わりに剣があるだろう？ それに学者になるのもいい。それが嫌なら職人に弟子入りしたっていいし、畑を耕すのもきつと楽しい。何かしたいことはないのか？」

「お師匠様、夕食はどうなさいます」

肯定も否定もなく話を逸らしたのは考えていないからだろうか。何をしたいと言っても怒らないというのに、弟子は未来の話をしたがらない。

やはり、ローゼンクレラの者として役職に就きたいのだろうか。

「……私とお前を二つで割って足したらちょうどいいのにな」

そうしたら、二人とも空の下で笑っていただろうか。分からないが、誰にも指を指されなかっただろう。

「師匠、泣かないでください」

「涙は流れてないが？」

「いいえ、泣いておられます」

言つと、無骨な指が目元を拭つた。

乾いたままの指を何度も往復させながら、弟子は泣かないでと繰り返す。もう一度、泣いていないと言つとようやく弟子は手を止めた。

魔女と、化け物と呼ばれる彼女に躊躇無く触れるのは、長い間でもこの弟子だけだった。

王は魔女を恐れている。

王は魔女を箱庭に閉じこめた。

魔女はいつでも空を望んでいた。

それ以外は何も望んだことはなかった。

それ以外の物しか与えられなかった。

力も富も権力も栄光も魔女は一度も望まなかった。

だが、人々は言うのだ。

「魔女は時期に王国を滅ぼす魔性になると。」

魔性は閉じこめなければならぬと。

人々にとつて力は魅力と共に憧憬であった。

それを持った魔女を人はねたみ恐れた。

だから、王の意思は国民の意思でもあった。

結婚の二文字は魔女を酷く煩わせた。

断る端から見計らったように別の相手が来る。ある者は権力欲しさの欲まみれ、またある者は魔女の力に怯えて話もままならない。げんなりとしながら去った見合い相手を見て魔女はため息をついた。扉が閉まったとたん、入れ違いに入ってきた弟子に魔女は貼り付けていた笑みを消した。そして、彼の持っているココアのカップを見つけて目を輝かせる。

「お疲れのようですね」

「……思い出させるな」

今日一日分の体力を使い果たした魔女はぐったりとテーブルに突っ伏しながらちまちまとココアをすすする。

王の要請は強くなっている。

「あと三人ほどいらっしやいますけどどうなさいます?」

「無理だ!」体調を崩したので「とでも言っただけ返してくれ。」

それと、王に送った書状の返事は?」

魔女は、見合いの話を白紙に戻せと言う内容の物を送ったが一ヶ月経っても返事は来ない。

「それが、お忙しいとのことだ」

「ほう、普段はどうでもいいような事で手紙を出すくせに、こちらの用件は聞かぬと来るか」

やはり王は魔女の言葉を聞かぬ。

心の中の何かが切れた。

怒ることもなく、また冷え冷えとした表情でもなく、ただ色の抜け落ちた布のような顔をした魔女に、弟子は不安そうな表情を送った。

魔女の相手は相変わらず決まらなかった。

断りを入れても二度、三度とやってくる者達を相手にしながら、
確実に魔女はすり減っていった。

しびれを切らせた王がいつ勅命を下すとも知れない中、魔女は部屋にこもりがちになる。

後編（前書き）

建物が壊れる表現があります。

後編

ある日、弟子が部屋に来た。

「お師匠、何か召し上がってください」

「いらぬ。喉を通らぬだろうよ」

返事がないことを変に思い、顔を上げて魔女は納得した。彼の手には何の用意もない。

「ここへ来た本当の目的を言え」

かないませんね、そう言っただけは肩をすくめた。

「単刀直入に申し上げます。お師匠様、城下で不穏な動きがございました。なんでも、お師匠様そっくりの女が街の壁を破壊し、物を盗み、毒薬を売り、脅し、市民を脅かしているそうです」

「ほう、それは大変だな」

「お師匠様！！」

ああ、長いつきあいとはよく言ったものだ。彼がこうして声を荒げるときはとても怒っているときだった。

「力を使ってやったのですね？ 城下は今や大混乱ですよ！」

「そうだ、たとえばお前はとうするとうのだ？」

思い切り皮肉を込めて笑ってみせた。

「私は飽いた。この生活に、空間に、王の言うままに占い、未来を

予見するだけのこの人生がつまらなくてたまらない。その鬱憤を、私の恩恵で生きながらえている者達で晴らして何が悪い？」

「本気で言っておられるのですか」

押し殺したような声に、喉の奥で笑ってみせた。ああ、本当に長く一緒にいた。どうやればこの弟子が怒るのか手に取るように分かる。

「ああそうさ。だが大人しいものだろう？ 篡奪を企ててもよかったが、その後のことが面倒でやめたのさ。ああそうだ、お前、今すぐここから出てお行き」

テーブルの上に置いてあった洋紙が浮き、弟子は受け取って目を見開いた。それを見ながら魔女は、さも楽しそうなふうを装った。

「これは何です」

「お前の就職先だ。私が口添えをしてやったのだぞ。よかったなあ、滅多に入れぬ大口だ。宮廷の騎士、それも副官だ」

明らかに圧力をかけて取ったそれに、彼は顔を真っ赤にした。明日、配属命令が届くはずだが一歩速く教えたのには訳がある。魔女はこの弟子にとことん嫌われなければならぬのだ。

「出て行け。お前の部屋はもうないぞ？」

今にも荷物は捨てられているかもしれないあとと言うと、彼は青ざめて部家を出ていった。足音が消えるまで待ってから、魔女はクローゼットのドアを開けた。

そこには魔女そっくりの人形が横たわっていた。力を使い、浮かせると窓の外に放り出す。人形は羽根もないのにふわふわと浮き、

箱庭の壁を越えた。

おそらく王には監視から毎夜飛び出す人形の報告が行っていることだろう。

だが、それでも人形の目を等して見る夜空の、なんと広く美しいことか。空を遮る窓枠も壁もない。人の手で作り出された物と自身の力で生きる草木のささやきの、なんと優しいことか。

一生箱庭から出られぬ鳥は、外界を隙間から覗いてうらやむしかない。

「外に出られるのであれば、どんな男の子どもでも産むというのにね……」

王は分かっている、けしてそれを承諾しない。

箱庭から出られるとすれば、それはローゼンクレラの先祖が眠る地へ行くときだけだ。魔女が死んだときだけなのだ。

今日も魔女は魔女を殺すために非道の行いをしに城下に下る。人々は嫌がり泣き叫びながらパニックを起こして、そして誰かが言うだろう。

箱庭の魔女を殺せと。

毎夜荒らし回った成果は着々と上がっているようだった。弟子が箱庭を出てからすでに一ヶ月以上が経っている。

人々は毎夜の恐怖を王に訴え嘆願書は山積みらしい。魔女の姿をした人形が討伐隊に追われる回数は格段に増えていた。宮廷が動くのは時間の問題だ。

なのに、

「またお前か。誰がこの箱庭に入っているかと許可を出した？」
「王にございますよ」

そう言つて久しぶりに顔を見た元弟子はどこかたくましくなつていた。かなりしごかれていたのは知っていたが、どうやら箱庭にいたものとして使いを頼まれてきたらしい。

「王からの書状です」

「内容は分かっている。悪戯を止めよ、と言つのだらう？ 答えは

「否」と王に」

「あなたは、ご自分の立場だよくわかつていらつしやる！ 俺がここに来たのは最終警告だと言つことも！ 次は王に忠誠を示すため大勢のローゼンクレラがやってくる！ あなたの家族が、あなたを殺しにやってくるんですよ！」

ああ、王も考えたものだ。魔女があこがれている”外の”ローゼンクレラに非道な行いができない事をよく知っている。

「愚鈍な王は、民衆を黙らせることはできなかったか」

ふつと笑う。床に膝をついた格好の彼は、安楽椅子に腰掛けた魔女を睨み付けた。

「何がおかしいのです！」

よもや、化け物を心配する者がいるとは思わなかった。そう言つたら彼はどんな顔をするだらう。考えて止めた。

「侮るな。凡人が束になつてかかつてきても負けはしない」

「師匠、いったいどうしたと言っんです？　あなたは人が変わられたようだ」

「普遍などありはしない。あるとしたらそれはまやかした。人は変わる、時はうつろう」

「だから、己を隔てる壁を壊してみせると仰るのか」

「ああそうだ。王は私の言葉を聞かなかった。たつた一つの事を望んでも、けして私をここから出さない。王の答えを覆すためにこれまで尽くしてきたよ。でも、王はけっきょく、死ぬまで私を閉じこめる」

「死ぬことになりまますよ」

「私が死ぬものか」

「いや、きつと死ぬだろう。大よりも小を潰すのが国なのだ。強き力の者がいなくとも、ローゼンクレラは残る。魔女の替えはいくらでもいる。」

「出て行け」

「あなたは平凡を望んでいたのではないのですか！」

「黙れ！」

彼の体が見えない力によって吹き飛んだ。壁を突き破って廊下に飛び出す。

口の端が切れて、血が流れていた。すまないと思っても、けして口には出さなかった。

「お前は”用無し”なのだよ。いつまで経っても出て行かずに、金魚の糞のようについて回る。いい加減うんざりだった。私の全てが分かったような口調で話すその態度にも吐き気がするのだよ。物覚えは悪かったし、使い道は剣だけだ。ローゼンクレラにはお前のような出来損ないは必要ないというのに、なぜ殺さなかったのだろう？」

心の中で何万回も謝罪しながら魔女は傷つける言葉を吐き続けた。彼の驚いたような顔が瞼の裏に焼き付く。

本当は、お前となんていたくなかった。だが、恥の上塗りだけは勘弁して欲しかった。やはり何の才能もない。使えない。同じ空間にいるだけで、腹が立つ。

気がつくくと、魔女は安楽椅子に深くもたれかかったまま吐息を吐いていた。他に誰の姿も見えない。帰ったのだろう。そして、もう二度とここには来ない。

さあ、最後の仕事だ。

魔女はまたクローゼットを開けて、自分とそっくりの人形を王宮に向かわせた。王にとって魔女が外にいることがどんなに脅威なのかはすでにわかっている。それが王宮に向いたとなれば、もう道は一つしかない。

ローゼンクレラは国王についた。魔女はただ一人で、それを迎え撃つのだろう。

翌日、箱庭の壁がこれまでにないほど開かれた。使用人が通るために常用していた小さな門とは別に、元々あった大きな門が開くのは二度しかなかった。

一度目は魔女が連れてこられたとき。

二度目は王が訪問したときの一度きり。

見えた世界は王宮騎士に始まって、兵や憧れの外の世界に住む口

「ゼンクレラの者達が見えた。魔女が踏み入ることのできない世界で暮らす者達。それをいつもの安楽椅子に座りながら窓越しに見つめる。」

昨夜のうちに、使用人は全て逃げ出した。この箱庭にいるのは魔女ただ一人である。

「神妙にされたし！ これは王のご意志である！」

目があつた瞬間、男は怯えたような表情を一瞬見せる。それでも彼は自分の担つた仕事を真つ当に果たした。

「お、王から、最後の温情である！ 大人しく投降せよ。罪を償い、謝罪と誠意を。断罪ののち、王はあなたをお許しになれる。だが、その申し出を蹴るのならばあなたを生かしておくわけにはいかない！」

王はまだ、魔女を飼ひ殺しにしたいらしい。笑い声さえ漏れた。立ち上がり、魔女は大きく窓を開けた。テラスへ出て手すりに肘を突いて頬杖を着くと、辺りは水を打つたように静まりかえった。

「問う。おまえ達の目の前にいる女は生きているのだろうか、死んでいるのだろうか」

なにを、とその唇が囁く。

「生きるとは何だ。心臓が動いていればおまえ達は満足か？ ならば、そう思える者達全てを私は羨み、憎むだろう。当たり前のように外を生きる民を、力の見返りにこの四角い空しかよこさぬ王を、箱庭に私を押し込めた一族を、心の底から。何しろ、ここまで来ても王の答えは変わらない」

「王は、あなたのために贅をこらしてこのお屋敷をお作りになった！ 何が気に入らないというのか！」

「全てが」

「王のために生きるのが、我等の勤めである！」

「お前は改めなければならぬ！」

「頭を垂れよ、降伏を！」

魔女は日焼けしない自分の白い肌と見比べて、小麦色の肌を眩しそうに見つめた。

「困いに覆われた場所に住んでる動物のことを何とというか知っているか」

彼らは怪訝な顔をする。魔女は続けた。

「家畜というのだ。お前達はこの箱庭に私を住まわせることで、とうに私を殺している。そして畜生に貶めた。そして子を産めという。まるで上等な家畜の数を増やすかのように。私はもはや人ですらない。血統書つきの愛玩動物ではないのに、お前達は私をそう扱い続けてきた」

どれほど忠義を尽くしても、見返りは四角い空だった。

どんなに心を砕いても、この箱庭の壁は高く触れてはならないと言われているようだった。

頑張っても報われない。どれほど付くしても無駄だと思い知らされる。

望みは叶えられない。永遠に。

魔女は箱庭の壁中に視線を向けた。天を覆うかのようにそびえ立った四方の壁が、音を立てて崩れ始める。

「王よ、聞こえるだろう！ 偽り無き私の本音。私の国を見る
ことがそんなにもいけないことなのか。私の見守る民を見ることが
それほどまでに罪悪か！ 許されぬと言うのか！」

壁が崩れる。瓦礫は外に落ちることなく庭を、邸を埋め尽くすよ
うに落下する。

悲鳴の中で魔女の声だけが響いた。

「宝石も広い家も作り物の庭もいらなかった！ ただ、困いのない
空がほしかった。さあ、予告通りに私の命をもらってゆけ。だがそ
れは、この箱庭と引き替えだ！」

笑いながら魔女はポケットに指を滑らせた。迷うことなく取り出
した瓶を開けた。

一口飲むほどに、頭がぼうとする。

ああこれで終わりだ。やっと自由になれる。

逃げまどう者達の中に、知った顔を見た。驚愕に見開かれた目に
笑みがこぼれる。

お別れだ。お前といるときだけは、箱庭を忘れていたよ。

魔女は呟き、崩れ落ちた瓦礫に飲み込まれた。

目が覚めると暗闇だった。寒くて、体が震えるが思うように動か
ない。何とか腕を伸ばすと、固い感触があった。おそらく、棺桶の
中に入れられている。

彼女は肉体が火に焼かれなかったことに感謝しながら、薄い空気
の中でゆっくりと蓋に被さる墓石や土を力を使ってどけた。蓋を開

け、外に出る。

「凄い、本物の空だ。困いがない」

「 凄いのはあなたですよ」

思わず呟いた言葉に返事が返ってきて驚いた。計画の頓挫を予感した彼女はぎよっとすると、目の前に何者かの手が振ってきた。見上げると、なんと知った顔ではないか。

「……なぜ」

「なぜ、は俺の方が聞きたい。あの後、国は大騒ぎでしたよ」

どうやら、計画はバレてしまったらしい。観念して彼の手を取って穴の中から抜け出すと、意外にもそこには誰もいなかった。

「城下を荒らして城の壁まで壊して後押ししたのに、弟子には全部筒抜けか」

なぜ分かったのだと問うと、弟子は肩をすくめた。

「知ってます？ いや、知らないか。あなた国葬されたんですよ」

その意味が示すところは、

「……失礼な奴らだ。私が祟るとでも思ってるのか」

「どうやらそのとおりらしい。さて、そろそろここを元に戻してください。あなたの祟りを恐れて毎晩祈りを捧げにやってくる者達がいるのです。ああ、国王にあなたの声は聞こえていましたよ。さすがローゼンクレラきっての天才だ。悲劇のヒロインになっていますよ？」

皮肉のこもった口調。怒っているのだろうが、ここがどこかの方が気になる。聞くと、王宮の端らしい。

「王が言っていました。あなたに酷いことをしたと」

「国民の手前だからそう言ったのだろう。それに目下の問題が消えて清々してるはずだ」

苦笑が漏れる。

「どれぐらい眠っていた？」

「三日です。まさか、自分で自分を仮死状態にする薬をつくるとは誰も思いつかなかったようです。ローゼンクレアの夢見にも、やはり見えないことがある」

「違う、力を水の中に込めたものを飲んだだけだ。私は本物の魔女ではないから、そんな薬は作れない。人形を操るときと同じ要領で、体の機能を停止させた。三日後に目が覚めるようにしてね」

それは、うまくいったらしい。

「な、火葬されたらどうするつもりだったのです!」

「天国に行くな。それで、お前はどのようにしてここに？ 私は裁判にかけるられるのかな？」

何だかもうどうでもいい気がした。この広い夜空を見られただけでも満足だ。

「あなたが生きていると知っているのは俺だけです。俺もまさか、あなたが生きているとは思わなかった」

「おかしい奴だ。ならなぜここへ？」

そう言いながら、魔女は掘り返した土や石を元に戻した。絶対に地上に出てくるなよ、と言いたげな穴の深さと、石の大きさに笑いが漏れる。

自分の墓を見ながら笑える者はいったいこの世にどれだけいるだろう。

「最後にこちらを見て何か言ったでしょう？ それにあんな大騒ぎを鬱憤晴らしでするような人じゃない。今回のことでは死者は一人も出なかったし、俺を怒らせたのもわざと。あんな言葉を投げかけられたのは、箱庭では初めてでしたよ」

「悪かった、本心からじゃない」

「わかってます」

腕が伸びてきて、魔女の頬をぐいぐいと拭った。どうやら土が付いていたらしい。

「こら、やめる」

「靴も自分で履けないくせに？」

「お前がやるなど言ったからだろう！ 私は外に出ることを考えて一人で何でもできるようになりたかったというのに、お前と来たらいつもいつも…」

ぶつぶつと恨み言を言った。私の計画は、この男のせいで二年も引き延ばされた。自分のことを自分でできるようにならなければ、国を出て生きることがは無理だと箱庭の中にも分かっていた。

「さて、私は行くが……どうやって抜け出そうか。後生だから抜け道を教えてくれないか？」

「何を言ってるんです。俺と一緒に国を出るんですよ？ こんな事

もあろうかと、馬車を用意してあります」

ああそうなのか、と言いかけてはたと気付く。

「何を言ってるんだ？ 他国の勧誘でもあったのか。私はもう王家はこりごりだぞ！」

「いいえ、俺があなたと一緒にいたいんです。今まで言わなかったけど、あなたのことが好きです。友達を好き、の好きではなくて、一人の女性として、愛しています」

「……お前にたくさん酷いことを言った女だ」

「嘘か本当かくらい分かりますよ」

「お、お前、私の弟子だろう？ 師弟は結婚なんかしない！」

「破門しておいて何を仰るのです」

そう言えば、呼び方がお師匠様からあなたに変わっている。

「それにあなた、言ってたじゃないですか」

と彼はまじめくさって続けた。

「外に出してくれるなら、どんな男の子どもでも産む」のでしよう？ なら俺の子を産んでください」

それは一人で部屋にいたときに、一度だけ呟いた言葉だった。

「おま、聞いて！？ 頭でも打ったのか！？」

「ご自分の声が意外に大きいことを知らないのは仕方がないですが、もう行かないと、本当に捕まってしまうですよ」

「話を流すな！ じゃなくて、職は！？ 本気なのか！」

「職は辞表を出しましたから明日には受理されるはずですよ。あらかたの荷物は換金したし、しばらくそれでやりくりしましょう。まったく、あなたが部屋のを捨てるとか言うから慌てたじゃありません

んか」

「え？」

実は、あの部屋の壁を掘って抜け道造ってたんですよ、と言われ魔女は目を丸くした。見つかつては大事だし、荷物も価値ある物を集めたりして少しずつ資金を貯めていたのだという。その資金は、どう考えても逃亡用のもので、魔女はあんぐりと口を開けた。

そう言えば昔からこつこつお金を貯めたりしていたような。用はまめな性格なのだ。それを生かして逃亡計画待て立てていたとは全く気付かなかつたが。

「……私がお前のためにせっかく用意した職も地位も捨てたのか。しかも、黙ってそんなことまで」

ぼそりと呟いたとき、腕を引いて歩き出した彼はくるりと振り返った。

「あなたと同じです。俺は地位も名誉も名家のお嬢さんもいらなかった。ただ、あなたのお側にあることを、ずっと望んでいたのです。なんと言われようと、もうおそばを離れません。あなたに困いのない太陽を差し上げます。だから俺と一緒に箱庭でないこの世界を歩いてはくれませんか」

魔女は声もなく唇を振るわせて、その手を取った。

箱庭の外

馬車が一台、湖のほとりで止まっていた。馬は離れた場所へ桶に入った水を飲み、彼は微笑ましそくに湖面に恐る恐る足をつけている彼女を見守る。だが、水底の魚を見つけたとたん顔をきらめかせたのを見て、慌てて声をかける。

「あまり深いところへ行かないで。泳げないんだから」

振り返った彼女はぱつと頬を染めた。

「う、うるさい！ 確かに私は泳げないがそんなものは」

「そんなものは？」

びっくり、とたしなめるような言葉に彼女は肩をすくませた。

「この旅に出たときの最初の言葉を覚えてる？」

しょんぼりとした彼女に、彼は微笑んで靴のまま水の中に入った。

「ぬ、ぬれるぞ」と少し焦ったような声を出して彼女はそわそわと周囲を見た。

誰かなんとかしてくれと助けを求めるかのような仕草に、彼は内心ため息をつきながらその手を取った。労働を知らない手は病的に白く細い。

「力は使わないって約束だろう？」

彼女はしょんぼりと、素直に反省した。

「わかってる、不用意なことや言動をとってもいけない、だろう」
「ここはもう箱庭じゃない。壁はなくなり、あなたは自由になったけど、そのぶん危険も多くなった。できるだけやっかいごとをさけるために気をつけてもらわなきゃ」

「……悪かった、力は使わない。でも、もう少しむこうがわに行っても」

「だめだ」

「ちよつとだけ」

「あなたは子どもですか」

むっとした彼女は言い返した。

「そういうお前は私の母親か！」

「……へえ」

青筋が浮いたのを見て彼女はぎくりと身を強ばらせた。

「オレが、あなたの母親に見えると。ほう、そうですか、ではそうではないと証明しなければなりませんね」

「つく、口調が戻ってるぞ」

逃げだそうとした手をぎゅっと捕まれ、彼女はひつと息を飲んだ。俯いたせいでわからないがこういうときは絶対に怒っているのだと長年の経験で知っている。その報復方法はたいてい三時のおやつが抜きだったり食われたりと、はなはだ不愉快だったのだが、最近はそのじゃない。

顔を真っ赤にした彼女は震えながらごめんなさいとか許してとかご無体とか叫びつつ後ずさるが、それを予想していた手に腰を引

き寄せられ、息をのんだ。

頭上に影がかかり、ぎゅっと目をつむる。

唇に暖かな感触が触れる瞬間、胸が熱を持つ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3722s/>

箱庭の魔女

2011年5月10日10時49分発行